
僕はアルバイト

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はアルバイト

【Zコード】

N4014E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

深夜のコンビニで働く、とあるアルバイトさんのお話。

僕は深夜勤務のコンビニアルバイト。自給が良いので、面倒が起きやすい深夜でも、なんとか我慢してやっている。

深夜はやっぱり酔っ払いが多い。

いきなり叫びだしたり、嘔吐したり、立ちショーンしたりと、まあ無法地帯もいいところ。

汚い真似をされることは稀だけど、酔つて怒りっぽくなっているお客様さんはたくさんいる。

僕は今まで五回くらい無意味に殴られたことがある。あまりにも殴られるので“殴られ屋、一回千円”と書いた帽子を被つたら、誰も殴らなくなつた。

稼ぎ時だと思ったのに、残念だ。

酔っ払いといえども昨日、夜にコンビニ強盗をやつしたことのお客さんがきた。

やつて来るなり開口一番「金を出せ」と言ひるので、レジの中身の三十万円を差し出してから

「三十万円になります」

と、僕はいつも通りのつまらない対応をした。

買ひすぎたなー、なんていいながらその人は財布から三十万円を取り出して僕に突きつけると、急にため息をついた。そして、なんだか憂鬱そうな顔になつて僕を見てきた。

面倒とは思つたけど、何をやつてる方なんですかと聞いてみた。そしたら、コンビニ強盗やつてるんだけど、彼はいう。

不景氣だからお仕事大変でしょうなんて聞くと、いきなり強盗さんはすすり泣きし始めて

「上手く行くときもあれば、からつきしな時もある」

と、悔しそうにそっぽを向いた。お子さんとかいらっしゃるんじやないですか？ なんて聞くと、今度は号泣し始めた。

酔つてゐるのかなあ、とその人を気遣うと、物凄く潤んだ目で

「兄ちゃんありがとう、俺子どものために足洗うよ

なんて勝手に話を進めて帰ってしまった。

最近の勤め人は、老若男女関係なく根気が無いなあと思った。

僕はこれでもここにコンビニに勤め始めて一年は経つのに。周りの人間は五ヶ月も経たないうちにやめている。一週間でやめた人もいた。

日本人の根性は、一体どこへ行つてしまつたのだろう？

仕事について振り返りながら始まつた今日、自分の子どもを捨てにやつてきた、女人の人気がやつてきた。

とはいゝ、決まりは決まり。家庭のゴミは出さないでくださいと、僕は注意した。そもそも生ゴミなんてここに捨てるものじゃない。そういうたら、女人の人は鼓膜を突き抜けそつなくらいの大声で、僕にまくし立てた。

「だつてこの子が言うこと聞かないからよ！ こんないらない子は捨てるの！ 捨てていいの！ わかる？」

「いらないかもせんけど、こちらでも始末しかねますので、どうにかしてください」

怒鳴る母の声を聞いて、子どももワーンワーンと泣き出した。

深夜なのに近所迷惑な……と困つていると、その人の夫らしい人が迎えにきて、母親の頬を引っ叩いた。

途端に泣き崩れる母親を尻目に、その夫は申し訳なさそうに腰を低くしながら

「お騒がせしました」

と深く僕に謝罪してきた。じついうとに慣れていない僕は、僕は適当に上手く返すと、一人を送つていった。

あんまりお客は選びたくないけど、夜にゴミを捨てにくる人と、

泣き止まない子どもを連れてくるお客さんはなんとかしてほしい。

翌日の仕事中、昨日のことを引きずつて眠そうにしていると、アメリカのフライーン大統領候補がうちにやってきた。

僕はその人にあんまり興味がなかつたので騒がなかつたけど、どういうわけかその人は僕に馴れ馴れしく話しかけてきた。正直鬱陶しいけれど、無下には出来ない。

「私ね、本当はもう疲れてしまったの」

やけに流暢な日本語で、僕は少し笑つてしまいそうになつたけれど、お客を不快にするわけにはいかないので、グッと耐える。

「本当は、相手のオバーマンのことを密かに愛しているの。夫よりもね、だけど、もうこの対立は止められないわ」

「禁断の愛ですね、燃えますか？」

「正直大統領選挙なんかより燃えるわ、その人と一緒に駆け落ちしたいくらい」

「頑張つてくださいね」

適当に話しているうちに、僕は有名人のサインをもらつておけば、後々高く売れるのではないかと思いつき、バックヤードに戻つて店の商品を自腹で買い、サイン色紙を用意した。

ただでさえお金が無いのだから、こつこつことをして一攫千金の気持ちで稼がないとやつていけない。

まだ居るよな？ ということを信じて店に出ると、店に銃を持った黒服の人達が来店していた。

強盗かな？ と僕が身構えると、その人はフライーン氏を射殺してしまつた。目的はそつちだつたらしい。

あーあ、せつかくサイン貰おうと思っていたのに、と少し恨めしそうに見ると、その人達はトランシーバーを取り出して

「やりましたオバーマン候補。ついに奴を仕留めました、これで当選は確定ですね」

なんて少しお話した後で、さつさと店から出て行つてしまつた。よ

く見ると、おにぎりが蜂の巣になつて全部駄目にされていたので、僕は「弁償しろー」と怒鳴りながら、その二人を追つた。

弁償はちゃんとしてもらつたけれど、まったく迷惑な話だ。ついでに、店に捨てていつた生ゴミも引き取つてもらつた。いつになつたら、お密さんは捨てていい場所を覚えてくれるんだろうな。

全く、お密様は神様とはよく言つたものだけど、それを良いことに好き勝手やりすぎじゃがないのか。

深夜のコンビニをなんだと思っているのだろうか。
便利屋ならまだいいけれど、もしかしたら皆さん市民公園と勘違いなさつているのではなかろうか？

今一度僕は、お密さんに問いたい。と頭では思いつつ、今日も僕はお密さんに深く頭を下げて、いつもどおりに「ありがとうございますー」と、言ひしかなかつた。
クビにされたくないですから。

家に帰るのはいつも朝の七時だつた。新聞受けにいつもの通り新聞が入つていたので、僕はそれを取り出すると、食卓でじっくりと今日の記事を読んだ。

最近テレビを見なくなつたから、世間に乗り遅れないためにもこれは欠かせない日課だ。

フライーン大統領射殺という大きな見出しの下辺りに、“妻が子どもについての口論の末、夫を刺殺”という記事と、“連続コンビニ強盗殺人犯が自首”という記事が載つていた。

それを読んで、改めて僕は最近テレビというものを見てないことを悔やんだ。

「あのお密さんが新聞に載るほどの有名人だつて知つてたら、サイン貰つてたのに」

金儲けのチャンスを逃したことを惜しみつつ、今日も僕は深夜勤

務のために、しっかりと睡眠を取り、布団に入った。

明日は、もうちょっとマシなお姉さんが来ます様に。

(後書き)

性懲りも無く、「はんライス先生に触発されて、自分なりに工夫した形で書いてみました。

意外とコンビニだのスーパーだのは書いてて楽しくはありますね。面白いいかどうかは別として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014e/>

僕はアルバイト

2010年10月8日15時11分発行